



ワルトラウト鈴木名誉会長 逝去

才能教育研究会のワルトラウト鈴木名誉会長が平成十二年十二月二十四日午後十一時三十五分、逝去されました。享年九十五歳。

葬儀ミサおよび告別式(密葬)は十二月二十七日午後一時から松本市丸の内のカトリック松本教会で行われました。

本葬は鈴木家・才能教育研究会の合同葬をもって一月二十五日午後一時から、同教会で営まれました。喪主は山田裕子先生、エリカ・ホルフォンツェフ夫人、葬儀委員長は豊田耕児会長。

本葬に際しましては

皇后陛下 皇太子殿下 紀宮殿下より  
弔意を賜わり  
高円宮殿下より供花を賜りました。

本葬における式辞・弔辞を掲載させていただきます。

式 辞

葬儀委員長  
才能教育研究会会長

豊田 耕児

これから鈴木ヨハンナ・ワルトラウトの告別の儀に入らせて頂きます。

ご来場の皆様、今日はこの厳しい寒さの中、遠方から、遙々海を越えてまで大勢お集まり下さり、誠にありがとうございます。故人に代り、心から御礼申し上げます。

周知の通り、才能教育の創始者、故鈴木鎮一先生の妻として、一九二八年以来七十年近くに亘り、日本を中心にこの運動を全世界に拡めるべく奔走致しました。

美しい姿に加え、ドイツ人らしい誠

## 奏法

弓先に力をきめて ふらつかず  
脇ですすめよ お馬の毛

すいつきかけんは 腕次第  
弾くも止めるも すいついて

浮かせては駄目、押えてもだめ

すいついた弓 ひとすじの  
うまさかな

## 練習について

毎日練習をする時刻をきめること。  
さあ時間ですよ、と言って、子供も  
納得して始める習慣をつけるように、  
朝のお食事の前とか、後とか、おやつ  
の前に弾いてからおやつとするとか、



1949年5月、東京・共立講堂での演奏

時刻を規則的につくってあげて下さい。  
おけいこは三月号に書きましたよう  
に、子供が集中心を持つ時間、五分の  
子は四分でやめ、十分の子は九分でや  
め、十五分の子は十三分か四分で練習  
をやめる、この要領は、子をみる親の  
指導の上手さとなります。

いやがるのに、もうほんの少し、な  
どというやり方は指導下手というもの  
です。

五分か三分のような初歩の集中心の  
うちは練習回数を多くすることです。  
多くのよく出来るお子さんは、一日  
三回にわけて少しずつやっています。  
上達して来て集中心が四十分、五十分  
となれば朝学校へゆく前一回、夕方か  
夜一回にでも練習すれば充分でしょ  
う。多ければ多いほど上達もいいとい  
うことは真理ですが、方法が悪ければ  
何もならないわけです。

## 後記

新世紀を迎えました。今、改めて才  
能教育運動発足当時の資料を繕とき、そ  
の歴史を振り返りつつ、半世紀を超え  
て歩み続けた、この運動の精神と意味  
を、より深めていただくために、この  
シリーズを企画しました。

ススキメソッド文献委員会

実さと意志の強さをもって鎮一先生を支え、相談役、著書の翻訳をはじめ、時には表て楯となり、時には後ろ楯となつて音楽を共にして来ました。

異郷の地にあり、勇氣と誠実さをもつて九十五年の生涯を全うされたことに対し、深い尊敬の意を表したく思いますが、お二人の生活は第二次世界大戦を前後して多くの艱難を乗り越えねばなりませんでしたが、お互いに信じ



合ひ、愛し合つておられたことが、周りの私共にもひしひしと感ぜられました。愛の力の大きさ、強さを知らされたこととす。

鎮一先生の亡くなられた後、ほぼ丸三年、ほとんどが闘病生活でしたが、時々々は海外に足を運び、親戚友人を訪ねることが好きで、その度に生氣を取り戻していたようです。

最後には姪エリカの側で大好きなモーツアルトの音楽を聴きつつ目を閉じました。

今は神様の許で鎮一先生と共に天国の音楽を聴いていることでしょう。

ここに一堂に会した我々皆の心の中に生き続けて頂きたい。

## 弔 辞

松本市長 有賀 正

才能教育の鈴木鎮一先生の奥様として先生とともに才能教育を深い愛情で育んでこられたヨハンナワルトアウト鈴木様はキリスト生誕から二千年を数えた去る十二月二十四日の聖夜九十五歳の天寿を持つて先生の待つ天に召されました

ここに松本市民を代表し奥様の御霊に謹んで哀悼の意を表し心からなるお別れの言葉を申し上げます

奥様は千九百五年ドイツベルリンでいつも美しい音楽が流れるチヨコレイト会社を経営する温かい家庭にお生まれになりました

しかし奥様が九歳の時第一次世界大戦が勃発以後奥様はあの美しく温和なお顔からはとても想像できない激動と苦難の生涯を歩まれたのでした戦火の中十一歳で父君を失いそして敗戦急激なインフレと貧困の毎日それでも心のよりどころを音楽に求める中でドイツに留学中の鈴木鎮一先生と出逢われ結婚四ヶ月

後 奥様は 東洋の未知の国 日本の上を踏むことになりました 言葉も文化もまったく異なる異境の地での暮らしが どんなに大変であったかは想像に難くありません しかし 奥様は 生来の明るさと鈴木先生の愛に支えられ 日本での暮らしに懸命に受け込んで行かれました

当時 鈴木家は 名古屋でバイオリン工場などを経営する有数の資産家でしたが 一年もたたないうちに 会社は アメリカの「暗黒の金曜日」のありを受けて 倒産 一家は絶望の淵に突き落とされました

しかし 二人は 希望を捨てず 新天地を求めて上京 奥様は 鈴木カルテットの演奏活動や 帝国音楽学校などで バイオリンを教える鈴木先生を助け ようやく平穩な暮らしを取り戻しました けれどもつかの間第二次世界大戦により 状況は一変し 生活のため 先生と別れて 海運会社 銀行などで働かれ 昭和二十一年 鈴木先

生は 才能教育をスタートして居りましたが 先生と松本で 昭和三十一年に再び暮らし始めるまで 実に十五年の歳月を要したのでした

奥様は 才能教育研究会にあって 鈴木先生の秘書的な役割を担われ 先生の著書の翻訳 外国からの訪問者の



通訳 外国への演奏旅行への同行など 鈴木メソッドを 全世界に広げる上で 大きな 役割を果たされました

鈴木先生は 九十九歳という天寿を全うされましたが 戦後から才能教育の草創期には 幾度も生死の間をさまよう大病をされ 三年間に渡って 奥様がつくる「オートミール」以外受け付けなかったこともあったとお伺いしましたが 先生の奇跡的な回復は 天が先生に与えた使命と 奥様の先生への深い愛情があったからに相違ありません

愛深ければ成すこと多し 鈴木先生ご夫妻に最も相応しいこの言葉は 才能教育の根底に流れる精神であり 鈴木先生の温かさ 大きさ 深さに 私達は 神さまのようなものを感じ 奥様の気高さ 優しさに 聖母マリアさまのようなものを感じた方も多いのではないのでしょうか

明日で 鈴木先生が天に召されて ちょうど三年の月日が流れます こう



して奥様のご遺影を前にしていますと先生のご葬儀の折に 奥様が 先生の楹に 小さなバイオリンをそつと納められた様子がよみがえり お二人を結ぶ絆の深さを思うと 胸が熱くなつてまいります

奥様は 鈴木先生亡き後も 先生とともに育ててこられた 才能教育の愛

の聖火をしっかりと守ってこられました。そして平成十一年七月三十日 市民会館で行われた 夏期学校の開校式の折に 奥様自らが 小さい頃から

お子様のように可愛がってこられ、今や 世界の豊田となられた 豊田耕児先生を後継者に指名され 才能教育の火を託されたのでした 今日 豊田先生が 才能教育研究会会長として 葬儀委員長を務められており 奥様も

さぞ ご満足のことと思います。そして 先生と奥様の魂は これからも音楽という永遠の生命の中で その炎を燃やし 生きつづけることでしょうか

奥様 長い間 本当に ありがとうございます。ございました。

どうか 安らかに 先生の待つ天国に旅立たれ 先生とともに 才能教育を 人類を 変わらぬ愛で お見守りください。

ご会葬の皆様と 故ヨハンナ ワルトラウト 鈴木様の御霊の 安らかな

らんことを願い お別れの言葉といたします

弔 辞

才能教育研究会常務理事  
東京外国語大学長

中嶋 嶺雄

故鈴木鎮一先生ご令室ワルトラウト・ブランゲ・鈴木女史のご霊前に謹んで弔意を表させていただきます。と申しましても、やはりいつものようにおばちゃまと呼ばせて下さい。おばちゃまはついに他界され、鎮一先生のお側に行かれることになりましたね。鎮一先生も今はきっと「よかったねえ」と言っておられることでしょう。時には慈母のように優しく、時にはウイットに富んだ少女のようにお茶目で、そして時にはお天気屋で怒りっぽいおばちゃまでしたが、しかしおばちゃまは一九二八(昭和三年)に鈴木鎮

一先生と結婚されて以来、生涯を通じて、いささか天衣無縫の鈴木鎮一先生をしつかりと支え、しばしばご苦労も重ねられながら、一貫して鎮一先生を敬愛されてきたのでした。とくに鎮一先生がお亡くなりになってからは、才能教育研究会の行く末についても大層心配をされていました。その意味では、いつも背筋を伸ばして凛々しく立っておられた気丈夫な女性として、異国での永い生涯を立派に生き抜かれたものと思います。

私がおばちゃまのお姿に最初に接したのは、昭和二十年代半ばの松本音楽院の生徒の頃、大柳町の鈴木先生のお宅であったと思います。といつてもその頃おばちゃまはたしか東京でお仕事をされていて、鈴木先生とはご一緒ではなく、時々松本へ来ておられたように思われます。そのおばちゃまが先生のお宅の庭の築山でベンチチェアに身を横たえて本を読んでおられた姿が目につかびますが、当時は生徒に親しく

接しられることはほとんどなかったと記憶しております。

したがって、私がおばちゃまと親しくお話するようになったのは、才能教育研究会の皆様と再会するようになったこと二十年程のことですが、おばちゃまによほど気に入られたのでしようか、いろいろなご相談にもよく預かりました。とくに昨年十月末に私が松本で主宰した「アジア・オープン・フォーラム」の時期には、どうしても私に話したいことがあるとのことでしたので、おばちゃまのお話を詳しく窺ったのでした。そのときに頂戴した宿題のお返事をしなければと気になっていた私は、たまたまこのクリスマス夜の夜に松本へ帰りましたので、よほどお宅へ伺おうかと思つて山田裕子さんにお電話してみたのですが連絡がつかず、一人で夜遅くに伺うのもどうかと思いとどまった翌朝、おばちゃまの計報に接したのでした。すぐに駆けつけ、安らかなお顔を拝見したのですが、

やはりおばちゃまが私を呼び寄せられたように思われてなりません。おばちゃまはこの一月二十八日のサントリールホールでの鈴木鎮一メモリアル・コンサートを楽しみにされていたのに、本当に残念でなりません。最期の二日間にはいろいろの人のことを話され、年末年始に入院することは絶対にしたくないと言われて、安らかな最期をみずから設計されたかのようなたとエリカさんは語っておられました。本当にご立派な最期でしたね。おばちゃま、もう安心です。どうか安らかにお眠り下さい。そして鎮一先生にもよろしくお伝え下さい。

今朝私は、松本市神田の私の別荘でおばちゃまとのお別れに「アヴェ・マリア」を弾いてきましたよ。  
では、さようなら。